神奈川県高等学校教科研究会

社会科部会報

2012（平成24）年10月24日発行
「第71号」

春季研究大会講演趣旨　柿崎一郎氏　2～4
各分科会報告・今後の活動予定 等　4～11
訃報……12～13

事務局　神奈川県立新城高等学校
岡崎　恭一
〒211-0042　川崎市中原区下新城1-14-1
TEL 044-766-7456　FAX 044-752-7812

平成24（2012）年度社会科部会秋季研究大会および講演会

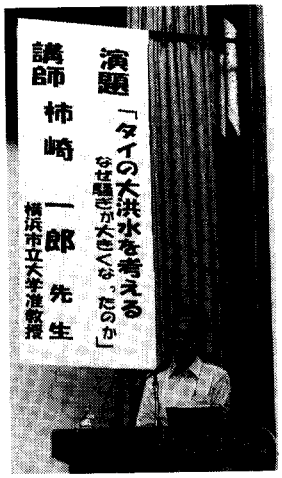
1　日　　時　平成24（2012）年10月24日（水）　9：00～17：00
2　会　　場　かながわ県民センター　　横浜市神奈川区鶴屋町2－24－2（TEL 045－312－1121）
3　時　　程　9：30～10：00　受付、資料配布（部会報など）
10：00～12：40　研究大会（大ホール）
総合司会　　能勢　博之（県立小田原高等学校）
開会のことば　　横田　智子（川崎市立商業高等学校・定時制）
部会長挨拶　　岡田　　健（県立菅高等学校長）
（10：10～）　研究発表
○歴史「イエドバブネ事件～第2次世界大戦中のポーランド～」
福本　　淳（栄光学園高等学校）
○地理「ロシア沿海州研修（2011年）の教材化～留意点および実践例～」
小川　剛史（サレジオ学院高等学校）
○倫政「生徒の動きを可視化した公民科カリキュラム構築の研究」
金子　幹夫（県立平塚農業高等学校初声分校）
（12：25～）　分科会報告・本部報告
12：40～13：40　昼食・休憩
13：40～14：00　広報活動（大ホール）
14：00～16：30　講演会　（大ホール）
4　講演内容
○【講　師】　青山　　亨 先生　（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）
○【演　題】　『仏教の展開から見た古代東南アジア―５世紀～９世紀』

＜講師プロフィール＞　青山　　亨（あおやま　とおる）先生
京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科修士課程修了、シドニー大学文学部インドネシア・マレー学科博士課程修了。鹿児島大学多島圏研究センター教授、東京外国語大学外国語学部教授等を経て現職。
【主な業績】
『新アジア仏教史４スリランカ・東南アジア　静と動の仏教』奈良康明・下田正弘・林行夫（編）．分担執筆（「サンスクリット化」の項目）2011年１月
「ベンガル湾を渡った古典インド文明―東南アジアの視点から―」
『南アジア研究』No.22. pp.261-276. 2010年12月
『世界史史料４　東アジア・内陸アジア・東南アジアII』岩波書店．分担執筆（３項目）2010年11月
「シンガサリ＝マジャパヒト王国」（pp.197-230）、「東ジャワの統一 王権―アイルランガ政権からクディリ王国へ―」（pp.141-167）『岩波講座東南アジア史２　東南アジア古代国家の成立と展開』石澤良昭（編）共著．岩波書店2001年７月
「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」『ラーマーヤナの宇宙：伝承と民族造型』金子量重・坂田貞二・鈴木正崇（編）．pp.140-164．共著．春秋社1998年１月
「ジャワ社会における自己と他者―文学テクストの世界観」『地域のイメージ』（地域の世界史第２巻）辛島昇・高山博（編）．pp.94-137．共著．山川出版社　1997年10月

2012年度　春季研究大会講演会要旨

タイの大洪水を考える
—なぜ騒ぎが大きくなったのか—

横浜市立大学国際総合科学部
准教授　柿崎　一郎 先生
（2012年5月23日　於　かながわ県民センター）



はじめに

皆さんご記憶に新しいと思いますが、去年10月から12月にかけてタイの多くの地域が大洪水に襲われたという話をニュースなどで聞いたことがあると思われます。タイの中心部はもともと水があふれるのが当たり前のような所なので、なぜ大騒ぎするのかというのがわれわれの印象でしたが、そのような前提で考えると、毎年起こる洪水に対して日系企業の対策が不十分であった問題が露見したというのが今回の騒動であったと思います。

タイはインドシナ半島の中央に位置し、象の顔を横から見た形に似ています。地形的には象の頭に当たる北部の山地、中部から東北部の平原・丘陵、バンコクを中心とするチャオプラヤー・デルタ、そしてマレー半島に分けられ、大部分の地域は雨季と乾季のある熱帯モンスーン気候に属します。したがって、中央部のデルタ地帯でも乾季の乾燥した状況と雨季の水がついた状況とが大きく違うことになります。

そのデルタの真ん中にあるのがバンコクですが、決して古い都ではなく北部から人々が移動してきて200年くらい前に都が置かれたもので、デルタも開発の歴史の新しい場所です。モンスーンの影響で、年の初めから４月にかけてと年末に降水量が非常に少ない乾季、５月から10月が雨季となりますから、それぞれで景観が大きく変わります。気温は４月くらいが一番暑く、雨季に入ると下がり始め、年末くらいが一番涼しくなりますので、タイでは４月くらいが夏、その前が冬、それ以外の時期が雨季と認識していて、「タイの季節はいくつか」と聞くと「３つ」と答えるのが普通です。

チャオプラヤー・デルタというのは非常に平らな場所というのが大きな特徴で、上流から運ばれた土砂が徐々に堆積してできたものです。その開発が始まるのが19世紀後半以降の米の商品化によるもので非常に新しい。もともと雨季になると水があふれるような場所でしたので洪水は避けられないもので、毎年どこかで洪水が起こり、大きな被害の出る洪水が何年かに一度起こるわけです。バンコクでは1942年の洪水が記録に残る中で大きなもので、バンコクにものが集まらず戦争で当時駐留していた日本軍の物資動員計画に影響を与えました。比較的最近では1983年に大規模な水害がありました。

2011年の洪水は少し被害が大きく、チャオプラヤー川中・下流域17県の500万人くらいが被害を受けたと言われています。農地では約1.8万km²が被害を受け、被害額は日本円にして約800億円。工場の被災が非常に多く、11月末の段階で838か所、被害額が4,745億バーツ、日本円にして１兆８千億円になりました。

１．なぜ洪水は起こったのか

一つは降水量が多かったという点が挙げられます。タイでは雨季と乾季があるので、雨季の間に水を貯めて乾季に流すというのが基本的な水の管理になるのですが、去年は非常に早い６月末ごろから多くの台風や熱帯低気圧がタイを通過して例年より降水量が多かったのに加えて、後で述べるように水の管理に失敗したというのが一つの説です。

次は土地利用の変化で、都市開発の進展により遊水地が減少し、1980年代の洪水では水を貯めていたような場所がなくなったということがあります。また、築堤上に作られた道路や都市計画が徹底されずに拡大した市街地が排水を妨げるということが起こったわけです。

それから水管理の失敗ということも言われています。チャオプラヤー川の上流にはいくつかのダムが建設されていてそのダムで水量を調節しているのですが、今年は雨季に雨が降らないだろうと水を貯え続けていたところ、例年より早く台風が来たりして降水量が多くなってしまいダムに押し寄せてきた。だからダムの水管理がちゃんと行われていなかったことが大洪水の要因になったと説明されています。もう一つは、チャオプラヤー川のデルタの西に分かれる流れがあり、こちらに水を流せばチャオプラ

ヤー川の水が減るはずなのが、それを抑制したために本流の水が増えたという指摘もあります。

2．洪水対策はどのようになっているのか

基本的に洪水対策して挙げられるのは、ダムの整備、堤防の整備、排水路の整備しかないというのが実情です。

チャオプラヤー川には60年代から70年代につくられたものを中心にいくつかの大きな多目的ダムがあるのですが、最大の任務は乾季の間の灌漑用水の確保ということにあります。この水を供給することで乾季でも稲作ができるようになりました。そのために上流で想定外の時期に大量の雨が降ったときに水を貯めきれなくなって、本来は大量に流すべきでない時期に流さざるを得なくなったということです。

堤防の整備という点では、タイでは川の水があふれるというのが自然であって、つい最近まで川に堤防を作って水があふれるのを防ぐということがあまりなかったのですが、今バンコクの市街地では川沿いに堤防を張り巡らしているところで、川沿いに民家があるところではそれをよけて作るのであちこちで途切れていてまだ完成はしていないのですが、ある程度整備は進んできていました。もう一つはバンコクの東と北を取り囲むように道路を利用した堤防が計画されていて、この二つで水位が高くなってもバンコクの中心街には水が入ってこないようにしようということにはしていました。

ほかに、中心市街の中にも道路の下に排水用のトンネルをいくつか掘って洪水の際に排水を迅速に行う地下水路も建設されています。しかしこれはバンコクの市内に集中豪雨が降った時に対応するもので、上流から大量の水が押し寄せてくることは念頭に置いていなかったのです。ですからそういう点ではまさに「想定外」の水が押し寄せてきたということになるわけです。

三番目の排水路の整備という点では、無数の運河網が排水路の役割を果たしていて、本流であふれた水を運河に流すことで対処していました。ただこれらの水路はあくまでも灌漑のためのものであって、排水路としては大きな期待はできません。そんな中で排水だけを目的に、蛇行するチャオプラヤー川を短絡する運河がようやく2010年に作られました。ですがまだ一つしかないということで、それ以外には個別の工業団地などで堤防を築いてある程度まで水が入ってこないようにするというようなことをやっていました。

3．なぜ騒ぎが大きくなったのか

やはり一番の要因は日系企業の工場の水没にあると思われます。日本でタイの大洪水が盛んに報道されたのは10月に入ってからのことでしたが、それ以前から上流の方では洪水が起こっていました。10月４日に工業団地の一つに水が入ってきたことで騒ぎが始まり、ホンダの工場のある工業団地に水が入ってきた９日から急激に大きくなってきます。その下流の工業団地も順番に飲み込まれて行き、最終的に７か所の工業団地が冠水して日系企業に大きな影響を与えることになりました。

次に水がバンコクに近づいてくると、首都のバンコクが水没するのではないかということに焦点が移ってきます。バンコクの北部のドンムアン空港に水が入ってくると中心部まで水が押し寄せる懸念が高まって報道を加速させました。そして10月29日の大潮で中心市街地が一気に冠水するのではないかという危機が高まってこれがまた騒ぎを大きくしました。ところが最終的には、バンコクの南部が冠水せずに収まったことで11月に入って騒ぎは沈静化しました。

もう一つ要因として挙げられるのは政治の話で、インラック政権にとっては政権発足直後に起こった洪水への対処が試金石とされましたが、タクシン派と反タクシン派の政争が続くタイにおいて、親タクシン派の政府に対してバンコク都知事は反タクシン派であり、相互の間で意思の疎通がうまくいかないと問題がでてきています。洪水への対処でもそれぞれが別のことをやったり違う発表をしたりと、両方の対応が対立するような状況であって、このような政治の対立がこの問題に大きな影響を与えたというのも、争点の一つとして騒ぎを大きくする要因になったと思われます。

日本のメディアでは水が退いた後はこの話は忘れ去られている傾向がありますが、タイでは今後どうするかという話がいまだに議論されています。

4．今後どうすべきか

個別的には、特に今回水に沈んだ工業団地では緊急対策として周りを取り囲む防水壁を今までよりも対応できる水位を高くするということを行ってます。ホンダの工場のあったローチャナ工業団地では１m以上かさ上げをして今回の最大水位以上の水が

来ても入ってこないことを念頭に壁を作っています。

遊水地の確保という点では、チャオプラヤー川の流域にはまだ多くの水田が残っていて、それを一時的に遊水地として利用できるように確保しているのですが、その範囲をさらに拡大するように動き出しています。ただし昔の浮稲と違って今の高収量品種は２ｍも３ｍも冠水すると収穫できなくなってしまいます。その場合の補償の制度をこれから作っていかなければならない。

それと同時に中長期的な対策も考えなければならないわけで、今盛んに言われているのは新しい放水路を作るということです。新しくバンコクの周りを回るように作る外環道路と一緒に排水路を作るという案や、従来からある運河を放水路として整備する案も提言されています。

もう一つ、水があふれることを前提とした街づくりをすべきだという主張をする人もいます。浸水する可能性のある所では１階建ての建物は作らず２階建て以上の建物を作って１階部分を生活の場としないという提言をしています。伝統的な高床式の住居を長所を活用しながら洪水を前提にした街をつくる必要があるというものです。現在では見られなくなったわけですが、かつてはこのように対応していたのですから不可能ではないわけです。

最終的に、政府は今年の２月に一つの案を出しました。それはチャオプラヤー川の東岸に上流から下流まで全長250kmの放水路を作る、流域に合計20か所の貯水池ダムを作る、そして土地利用計画を策定し、遊水地として今後も残す場所、水があふれてはいけない場所、あふれても構わない場所に分けて開発をするというものです。ただ、ダムについては上流に与える影響もあって、どれぐらいうまくいくかよくわからない状況にあります。

最後に危機を乗り越えるということについて。今回の騒ぎでタイの製造拠点としての重要性が再認識されたと思います。タイで作っている部品がなくなったことで世界中のものづくりに大きな影響を与えるになったという点で、国際社会に対してタイは責任を負わなければならないということを認識したものと思われます。企業側としてもタイに一極集中させておくことの問題点があり、生産拠点を移すことにつながっていく可能性もあるわけで、実際そういう動きもあります。

ですからこの問題を克服していかないと、大洪水がこの後も続いていくようではものづくりの拠点が逃げていく可能性もあります。その点で、2006年から続いている政治的対立をはじめとする危機を乗り越えていかないと、タイも周りの後から来る国に追いつき、追い越されてしまうという懸念を持っている人もいます。

そういう点でも、今回の洪水を教訓としてうまく活かして今後のタイの進むべき道を皆で決めていかなくてはならないという気がしております。

どうもありがとうございました。

（要約　県立鶴見高校　石田　諭司）

歴史分科会活動報告

歴史分科会高大連携の試み

世界史研究推進委員会を中心に実施しているこの試みも今年度で６回目を迎えることとなりました。今年度は、８月６日（月）～８日（水）の３日間、昨年と同じ栄光学園高校を会場に行われました。午前は生徒への授業、午後は参観教員との研究討議という形式も例年どおりのものです。今年は、「18世紀のアジアをどう教えるか」というテーマで、18世紀アジアの捉え方とその教材化のあり方等をめぐって、連日活発な議論が交わされ、大変有意義な研修となりました。各日のテーマ・講師・参加者は次のとおりです。

１日目　「18世紀の東アジア世界」
　講師：矢野　慎一（県立柏陽高等学校）
　　杉山　清彦（東京大学）
　　生徒37名、教員51名、大学・出版社13名

２日目　「18世紀の東南アジア世界」
　講師：福本　　淳（栄光学園高等学校）
　　桃木　至朗（大阪大学）
　　生徒24名、教員53名、大学・出版社７名

３日目「18世紀の南アジア世界」
　講師：杉山　　登（逗子開成高等学校）
　　秋田　　茂（大阪大学）
　　生徒26名、教員49名、大学・出版社７名

午前の部の模擬授業では、栄光学園高校の他、清泉女学院高校、県立柏陽高校・横須賀高校・湘南高校などの生徒諸君が参加しました。

午後の研究討議・意見交換では、県内各校に加え、東京都・大阪府など他都府県の先生方にも参加いただきました。

さて、2007年度から継続してきましたこの高大連携の試みですが、来年度は、全歴研神奈川大会の実施に伴い一旦お休みとさせていただきます。再来年度以降、ここまでの足掛け６年間の成果と反省を踏まえまして、さらなる内容の充実を期して再開できればと考えております。

各先生方におかれましては、校務ご多忙の折とは存じますが、今後ともこの高大連携の試み、および世界史研究推進委員会を初め社会科部会各委員会への参加を、重ねてお願いいたします。

（県立寒川高校　根岸　洋史）

日本史研究推進委員会

柏陽高校日本史サマーセミナー

夏休み恒例の日本史サマーセミナーも６回目。今年は、８月22日（水）と23日（木）の２日間にわたって開催され、柏陽高校の生徒18名が参加しました。各日のテーマ・講師は次のとおりです。

８月22日（水）

Ⅰ　「日本の産業革命」

授業者：同志社大学　児玉　祥一 准教授

Ⅱ　「昭和恐慌史」

授業者：逗子開成中学・高等学校　杉山　登

８月23日（木）

Ⅰ　「糸の近現代史」

授業者：県立柏陽高等学校　矢野　慎一

Ⅱ　「松方財政」

授業者：県立柏陽高等学校　渡辺　研悟

１日目の児玉先生の講義は、冒頭に大学入試センター試験に関する傾向・勉強の仕方についてのお話があり、受験指導をする上でも参考になる内容でした。２日間とも、午前は生徒対象の授業に教員も参加する形式が２本行われ、午後は教員対象の研究協議が行われました。今年度は特に多くの先生方の参加が得られ、大変有意義な２日間を過ごすことができたのではないかと思います。

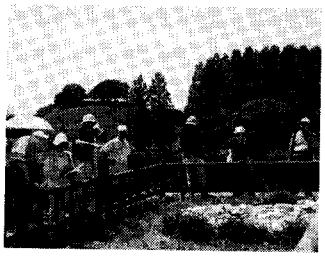
（県立茅ヶ崎高校　中田　　稔）

史跡踏査委員会

第51回夏季県外史跡踏査

平成24年度夏季県外史跡踏査は北関東（古河、行田、新田、富岡、高崎、前橋）方面「関東における政治・経済・文化の要を利根川水系に探る」と題して８月17日、18日に行われた。

朝から30度超の暑さの中、蓮田SAで講師の内山俊身先生（茨城県立古河第一高等学校定時制）と合流し、早速車中にて古代から近世までの古河についてお話をうかがった。最初の踏査地、古河歴史博物館では、近世古河藩の展示を中心に、古代以来関東地方の要地であり続けた歴史を復元ジオラマなど多くの展示物で目にすることができた。古河の立地の特性は、東京湾と霞ヶ浦を中心とした「香取海」という二大内海経済圏の結節点で、中山道から東北道に至る関東地方の主要交通路の中継地ともなる場所であることから、「近畿地方の平安京の立地に酷似している。」と内山先生は力説する。鎌倉街道沿いの旧城下町から渡良瀬川の河川敷沿いにバスは進み、中世から古河の経済の中枢をになった馬借・河岸跡を車窓に望み、古河公方足利義氏・氏姫の墓と伝古河御所跡がある古河総合公園を歩き、関東の政治の中心であった往時を偲んだ。古河を歩いても「視覚的に歴史的価値を訴えるものがあまりない。それでもここは関東の首都に成り得た重要な場所である。それをどう伝えるか。」内山先生の史跡に対する熱い思いに参加者一同が心を打たれた。



行田市さきたま古墳群では36度を超える炎天下、講師の高橋一夫先生（国士舘大学講師）にお出迎え頂き、早速国宝金錯銘鉄剣出土の稲荷山古墳へと向かった。

墳丘上で、５世紀後半から７世紀に至る８基の前方後円墳と各１基の大円墳、方墳からなる古墳群の被葬者について、３つの系統を想定し、首長権継承関係についての諸説を説明して頂いた。「ものは動く。動かない古墳自体と違って、動産である鉄剣の所持者が誰であったのか？その結論については慎重に考えなければならない。」高橋先生の自嘲気味な言葉に、歴史を教える立場の参加者一同は感銘を受けた。そして石田三成の水攻めで知られる戦国時代成田氏の居城、忍城跡に向かった。三成の本陣がおかれたさきたま古墳群丸墓山と、墳丘を起点に荒川と利根川の堤防を繋いだ「石田堤」の現状については高橋先生に現地で教えて頂いた。行田市郷土博物館では復元ジオラマや映像によって、豊臣秀吉の小田原攻めに対抗した戦国時代の関東武士の気概を感じとることが

できた。

続いて太田市新田荘遺跡に向かった。はじめに江田氏館跡発掘現場で担当者から説明を受けた。調査は平成18年より行われ、土塁内の主郭部に掘立て柱建物が17棟確認されたこと。そして、鎌倉・室町時代からの館跡とされてきた当地は戦国期になってからの城跡の可能性が高いことなど、調査成果を聞いたところで突風と夕立に追い立てられるように新田荘歴史資料館へ向かった。資料館では講師の小宮俊久先生（太田市教育委員会）より、新田荘の復元ジオラマや地図を前に新田義貞挙兵までの荘園の歴史について解説を受けた。車窓より縁切寺満徳寺と生品神社を見学して１日目の踏査を終えた。

２日目は群馬県磯部温泉を出発して、安中市の碓氷社本社、新島襄旧宅、安中藩武家長屋などを見学したのち、官営模範工場富岡製糸場跡へと向った。原合名会社時代に増築された食堂に入り、早速今井幹夫先生（富岡製糸場総合研究センター所長）から講義をうけた。続いて隣の「女工館」２階へと上がり、木骨煉瓦造りの倉庫や建物の構造について説明を受けた。「建築当初から大きな損壊もなく現存しているこの製糸場の建物群を造った大工は、幕末に横須賀製鉄所建設に関わった村松留太郎と溝口勝三郎です。」と開港地神奈川県との関わりを軸に設立当初の製糸場について今井先生の研究成果が展開する。官営、三井、原、片倉と経営者が変わるなかで時代を反映して一部を作り替えながらも、基本的な部分は設立当初の施設がそのまま使われているところに、今年日本の代表的近代化遺産として世界遺産推薦が決定したこの史跡の潜在的な力を感じ取ることができた。「横浜、横須賀との関わりがとても深い富岡について、先生方もぜひ色々と調べて新しい発見をして欲しい。」今井先生の飽くなき探求心に、参加者一同がおおいに刺激された。

富岡での昼食後に高崎市群馬の森へと向かった。最初に県立歴史博物館の講義室へ入り、手島仁先生（県立歴史博物館学芸員）から、旧陸軍の岩鼻火薬製造所の歴史と、その跡地に群馬の森が造られた経緯について概説して頂き、いまに息づく「群馬の近現代史」について学んだ。展示室に移動するとスバルや富嶽といった実物・復元モデルの展示や、中島知久平の生涯についての解説パネルがあり、手島先生は中島が産業県群馬の形成にいかに大きな影響を与えたか、そして政治家としていかに魅力的であったかを強調する。続いて館内の群馬県内古墳出土遺物の展示などを見学し、巨大な土塁が多く残されている公園内の火薬製造所関連遺構を巡った。

続いて綿貫観音山古墳では石室内を見学し、講師の高島英之先生（群馬県埋蔵文化財調査事業団）から群馬県の古墳時代について説明を受けつつ、かみつけの里博物館へと向かった。博物館のある保渡田古墳群一帯は、榛名山の山麓に位置し、古墳時代後期の豪族居館遺跡三ツ寺遺跡や、多くの住居跡・水田跡・牧場跡が広がるこの時代の一大生産基地であった。「この地域の耕作地を掘ると、かなりの確率で古代までの田畑生産遺構が見つかる。国府が置かれた頃まで群馬県の中心地であるばかりか、関東地方の中心地であったことは間違いない。」復元された八幡塚古墳上で、大和王権と駆け引きをしながら「上毛野国」の豊かな大地で繁栄した首長たちの生活を偲びながら今回の踏査も無事に終了した。

（市立川崎総合科学高校　阿部　功嗣）

今後の活動予定

<テスト委員会>

昨年度より、社会科の県下一斉テストも国・数・英とあわせて11月実施となりました。８月下旬に問題の審査を終え、９月に校正を行います。

<史跡踏査委員会>

秋季史跡踏査は、11月７日（水）に実施します。今回は、川崎市幸区から横浜市港北区にかけての古墳・集落遺跡および太平洋戦争末期の戦争遺跡である日吉台地下壕の踏査を行います。見学地の都合で平日の開催となりますが、多数のご参加をお待ちしております。

<海外史跡踏査委員会>

海外史跡踏査委員会では、2013年８月に「中国東北部の旅～高句麗・清朝・日中戦争の文化遺産を訪ねて～」という研修旅行を計画しています。詳しい内容と募集案内は、来年３月の歴史分科会春季研究大会にて、配布予定ですので、どうぞご

期待ください。

<研究大会関係>

年度末恒例の歴史分科会春季研究発表大会は、2013年３月６日（水）に本郷台のあーすぷらざ（県立地球市民かながわプラザ）にて開催します。講演会は、東アジア前近代の国際交流史（海域アジア史）がご専門の山内晋次先生(神戸女子大学)にお願いしました。日本史・世界史、どちらの視点からも興味深い講演が期待できます。

また、来年（2013年）は、７月31日（水）～８月２日（金）の間、全国歴史教育研究協議会（全歴研）の神奈川大会が開催されます。こちらの方にも、ぜひご参加いただきますようお願い申し上げます。

地理分科会活動報告

野外調査委員会

夏季野外調査報告（2012年8月21日～23日）

１．はじめに

８月21日～23日、群馬県をフィールドに夏季野外調査を実施した。富岡製糸場など近代化遺産、足尾銅山鉱毒事件の舞台を踏査し、日本の近代化の光と影を考察した。猛暑の中で体力勝負というところがあったが、足尾で植樹という貴重な体験もでき、有意義な野外調査になった。

２．８月21日（火）

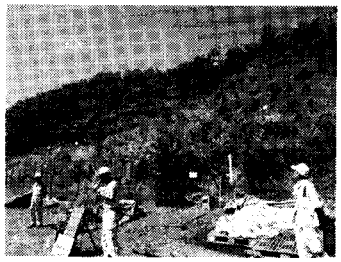
高崎駅に集合して、富岡製糸場に向かった。富岡製糸場では館内ガイドの案内で見学した。富岡製糸場は1872（明治５）年に建設された日本で最初の官営模範工場だった。お雇い外国人のフランス人ブリュナの指導によるものだった。今でも木骨レンガ造の繰糸場・東繭倉庫、ブリュナ館（首長館）、検査人館など創業当時の建物が残っている。建物のレンガも工場近くの窯で焼いたものだった。南向きの見晴らしのよい場所にブリュナの住まいがあったことは、いかにお雇い外国人が優遇されていたかを物語っている。その後、桐生に移動。桐生再生ガイドの清水さんの案内で桐生新町（本町1丁目～2丁目）を歩いた。1590（天正18）年、徳川氏の代官であった大久保長安が、街道を幅５間に拡げ、その街道の両側に、間口６間から６間３尺ほど、奥行き40間ほどの短冊状の町割りを行い、新町を建設した。ここは今年の７月に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。桐生は江戸時代からの絹織物（桐生織）の産地で、両毛機業地帯の中心地として栄えた。桐生は戦災がほとんどなかったため、戦前からの建物が今でも残っており、とくに「のこぎり屋根」の機織工場、織物を保管していた「蔵」などが点在している。近江商人出身の矢野家が所有していた蔵がある「有鄰館」やレンガ造りでのこぎり屋根の工場を再利用したベーカリーカフェレンガを見学。全国各地のお守り袋用生地を製織している岩秀織物では機織作業を見学できた。

（県立茅ヶ崎西浜高校　新井　隆）

３．8月22日（火）

この日は旧足尾町（現日光市）中心のフィールドワークとなった。宿舎のサンレイク草木をバスで出発し、わたらせ渓谷鉄道の神戸駅から足尾駅間は車窓の風景を楽しみながら、１両編成の気動車で移動した。足尾駅でＮＰＯ法人「足尾まるごと井戸端会議」現地ガイドの山田さんと合流し、かつて足尾銅山の煙害の被害が最も大きかった松木渓谷にバスで向かった。途中で一般車両進入禁止の松木ゲートを超え、「足尾に緑を育てる会」のメンバーの方々が植樹活動をしている法面の下でバスを降りて、植樹活動の概略の説明を受けた後、全員で法面に登り、記念植樹（みずならの苗木）を行った。

その後、バスで渓谷の奥地に向かい、途中からは徒歩でカラミ（銅を精錬する時に出る不純物で鉄分が多い）堆積場・旧松木村跡地や緑化が進んだ山肌を間近に見ることができた。ガイドの方の「足尾でおきていたことを正しく伝えたい。古河鉱業も何もしていなかったわけではなく、不十分ながらも色々な対策は行っていた。」という説明が印象に残った。足尾歴史館は2005年開館の展示施設で、これまで公害などの負の面が強調されていた足尾銅山の、日本の近代化に貢献した光の部分にもスポットを当てているのが特徴である。館内の明治・大正・昭和の写真は、全国の鉱山で足尾しか見ることのできない大変珍しいものが展示されており、参加者は熱心にガイドの説明に耳を傾けてい



た。次の訪問地は足尾銅山である。坑道の一部は観光用として、一般に公開されている。一行は、坑内に入るトロッコに乗車して、通洞口といわれる入口から坑内へ向かった。トロッコは５分ほどで下車して、肌寒い坑内を徒歩で見学した。坑内は、江戸時代から昭和48年の閉山までの銅の採掘現場が分かりやすく説明つきで保存されている。また、実際に使われていた道具類や鉱石の展示や探検シアターなどもあって子どもでも興味を持てるような親しみやすい施設になっている。最後に訪れたのは古河掛水倶楽部である。古河鉱業が明治時代に会議や宿泊などに使用していたレンガ造りの迎賓館で、英国人のジョサイア＝コンドルの影響を強く受けた辰野葛西設計事務所の設計であると考えられている。現在は建物の一部が残されており一般の見学も可能であるが、あいにく当日は会社の用事で使用中ということで内部の見学はできず、敷地の外から外観を見学した。

（県立舞岡高校　山中　政志）

４．8月23日（水）

まず富士重工業矢島工場を訪問した。太田市にある富士重工業の工場の一つで、主にプレス・塗装・組立・完成検査を行っている。勤務は二交代制で稼働している。運転支援システム「アイサイト」効果などで納車待ちの顧客が多く、工場の生産体制もフル稼働だそうだ。併設されているビジターセンターにはスバル360をはじめとする歴代の名車が展示されていた。次に群馬県邑楽郡大泉町に向かった。1990年の出入国管理法の改正によってブラジル、ペルーの日系人が日本国内で自由に働けるようになり、町では日系人を積極的に誘致し、外国人登録者が全人口の約15.7%を占めるようになった。到着後、ブラジル人が訪れるスーパーマーケットに足を運んだ。店内はブラジルそのものの雰囲気であった。この後、田中正造記念館を訪れた。使われなくなった館林市の旧保育園で、倉庫として使われていた建物である。いかにも質素な田中正造らしい。2013年は「正造没後100年」にあたり、記念館を館林の家屋へ移転先として予定している。本調査の最終訪問地は渡良瀬遊水地である。

４県の県境にまたがる日本最大級の遊水池である。本年７月にラムサール条約登録地となった。ガイドさんの案内で谷中村役場跡地、雷電神社跡地などの遺跡を見学した。ヨシの自生地であるが、放射能汚染の影響でヨシ焼きができず、希少な植物が減少していることを伺った。この後、JR古河駅にて解散し野外調査は無事終了した。

（県立大師高校　橋本　達也）

今後の活動予定

<企画委員会>

2013年３月６日（水）に地理分科会研究発表会を行います。会場はかながわ労働プラザ（Ｌプラザ）で、ここ数年と同様に午後に実施をする予定です。来年度から新教育課程が導入され、地誌分野の比重が増加します。そのような状況もふまえて、今年度のテーマは「新課程地理Ａでの東・東南・南アジアの生活と文化の教え方（仮題）」です。現在詳しい内容については検討中ですが、例年と同じようにパネルディスカッションを行います。今年度のパネラーは會田洋一先生（川崎市立商業高校・定）、土谷優子先生（県立光陵高校）、布山明先生（川崎市立川崎高校・定）という若手の３名です。限られた時間の中で東・東南・南アジアの姿を生徒に理解をさせ、その社会が直面するさまざまな問題を認識させるには、どのような視点で地域を見て、どのようなテーマで授業を展開すればいいのでしょうか。多くの先生方に参加していただき、新指導要領のもとで東・東南・南アジアをどう扱うかについて活発な議論を交わしたいと考えています。

<野外調査委員会>

12月６日（木）（予定）の午後に、厚木・海老名を中心にした野外調査を行います。詳細は要項をご覧ください。

倫政現社分科会活動報告

全国公民科・社会科教育研究会
平成24年度全国研究大会報告

8月２・３日、はや涼風が渡る北海道札幌の地において全国公民科・社会科教育研究会全国研究大会が開催された。研究主題を「持続可能な社会における公民的資質と課題解決能力の育成」として、会場では熱心な講演・発表や討議が続いた。以下は、参加した報告者にとって印象に残ったことを中心にまとめたものである。

1．澤田　浩一氏講演

（文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官）

「新学習指導要領における実践課題」

講師はまず次のことを指摘した。PISAの65カ国調査「高校生のうち、自分が満足しているかについて先生は関心があると思っている割合は？」について、ほとんどの国が５割を超えている中、日本は最下位の65位、28％であった。また国内企業にきくと、学卒新入社員に関してコミュニケーション能力・主体的に考える力・チャレンジ精神等の不足を指摘する声は強い。今、高校の教員には、ただ教科書を教えるのではなく、教科書でどう教えるかについての授業改善が求められている。ところで、生徒に身につけさせたい学力とは何であろうか。それは、生徒自らが主体的に問題を見つけ、調べ、考え、判断し、他者とコミュニケーションをとりあいながら問題解決していく力ではないだろうか。教員は生徒との信頼関係の上に、生徒の探究を促すような問いをどのように発し、生徒に語らせる機会をどのようにつくっていくか、工夫しなければならない。また観点別評価の項目は、教員が生徒の中にあるどのような能力が育っていって欲しいかを示すものであり、観点別評価の実施を通して生徒はそれに応えていってくれるものなのである。

その際、たんに知性だけではなく感性や情感やコミュニケーション能力などをともに生徒の内に育むことが大切である。道徳教育はそれを目指すものであり、徳目を注入することではないのであって、広くとらえてほしい。

最後に、講師は「中等教育資料　平成24年２月号」に掲載された野家啓一氏の『哲学リテラシーの必要性』を引いて話を閉じた。野家氏が言うには、東日本大震災やそれに続く原発事故以来、科学や技術の有用性、ひいては現代文明の在り方が問われている。哲学はそれ自体すぐに何かの役に立つものではないが、「役に立つ」とは何かを考える、個々の科学を超えた学である。2000年以上前にソクラテスがそうしたように、現代の私たちも、生徒たちと一緒に、自明であると思われていたことを今一度問い直す必要があるのではないだろうか。

2．北海道高等学校「倫理」「現代社会」研究会研究発表

「過去35年間における高校生・保護者の意識に関する研究 ～自我逸失時代の教育～」

北海道の高校公民科教員でつくる研究会では、およそ５年ごとに35年にわたり、ほぼ同一の質問事項で高校生や保護者にアンケートをとり、意識の変化について統計し、分析してきた。2010年にも道内の公私立高校２年生男女1,604人およびその保護者713名から回答を得た。その結果、近年の傾向として次のようなことが浮かび上がってくる。

高校には、「知識や技術を身につけるため」など目的をもって入学して来る生徒が半数を超え、勉強や部活動を中心に学校生活を送る生徒も半数を超え、高校生活に満足している生徒は６割と高まっている。また、自殺や家出やいじめなど問題行動に関わる生徒は減少傾向にある。やりがいのある仕事に就けるようになるために進路や学習に悩み、親や教師の言うことには耳を傾けるようになっている。

しかし、それらは双手を挙げて歓迎すべきことなのであろうか。調査では、家庭で新聞を読む生徒は減り続け、その代わりケータイやネットで暇なときコミュニケーションを取る生徒は増えている。このことからも分かるように、互いにわかり合える小集団で群れることで満足し、外界との間で波風を立てることを厭い、順応性や素直さを見せる高校生が増えてきているのではないだろうか。いま自我未発達な高校生、ヴァーチャルな空間に身を委ねて、複雑な社会状況には思考停止となり身近な単純なことしか理解できない高校生が増殖しているのではないだろうか。彼ら彼女らは自らの能力を早くから見限り、進路に関し高望みもしないし、学校に大きな期待を寄せることもない。「現状に満足せずよりよく生きようとする層」、「現状に不満で問題行動に向かう層」のほかに、このような「無欲・無関心な現状肯定層」は高校生の６割に上ると見積もられる。当研究会は、どの生徒の中にもある承認欲求を自尊感情に高めていく「一人ひとりを大切にする教育」を地道に実践していくことが、迂遠なようだがブレークスルーになるのではないかと分析を結ぶ。

3．分科会

①「公民科における異文化理解・国際協力の推進について ～グローバルな視点をもった人を育てる～」（福岡県立筑紫中央高等学校指導教諭　藤田　昭男）

発表者は、グローバル化を意識した授業実践と

して、次のことを行っている。１つには、毎時間授業開始時に出席番号順に２名ずつあて、新聞を持参させ興味を持った記事について３分程度で要約し発表させることを年間通して行っている。定期考査にも生徒の発表の中から20点分出題している。もう１つは、「カルチュアショックから伝える異文化」紹介を授業で行っている。発表者は、マレーシアで文部科学省派遣教員として２年間マラヤ大学で日本留学を志望している学生を教えた経験をもつ。イスラム圏での生活体験を、実物を見せながら話している。このような授業を通して、生徒の中からはJICA九州国際センターで毎年開催される「高校生国際協力実体験プログラム」に参加したり、大学の留学生会館で行われる交流会に出かけたり、外交官を目指す者も現れたりしている。

フロアからは次のような質問があり、議論が盛り上がった。自分たちが生活する地域の中でできる国際理解教育はないのか。外国文化との比較を通して日本文化のもつ特殊性と普遍性をどのように教えているのか。また、クラスに外国籍の生徒がいるとき、異文化理解教育がその国の文化やその国から来た生徒への蔑視につながらないようにするためにはどのような配慮が必要なのか等。

②「法教育を学校現場にどう実践するか ～弁護士との連携に着目して～」（北海道立札幌月寒高等学校　山口　晴敬）

発表者は、北海道における法教育の中心として、札幌弁護士会と協働して長年、「ジュニアロースクール札幌」の開催、弁護士の出前授業の実施、「法教育研究協議会」の運営に携わってきた。そのなかで、発表者は、公民科授業において、弁護士とうち合わせを重ね、TTで実践してきた次の事例を紹介した。憲法の「表現の自由」が問題となる。

架空のケース。動物保護団体のメンバーである浜口一郎氏が、「毛皮販売停止を求める国会請願のビラ」を、毛皮販売会社の社宅マンションの新聞受けに撒いた。マンションには「関係者以外の立ち入り禁止。ビラまき等の禁止」のプレートが掲げられていた。マンション管理人は警察に通報し、警察はビラを撒いたこの浜口一郎氏を現行犯逮捕した。

グループワークとして、浜口さんを無罪とするためにはどのような理由付けが考えられるか。浜口氏とマンション側との間の対立する利益とは何か。もしビラが「震災復興を求める国会請願のビラ」「ピザ屋の宣伝チラシ」だったら、判断は変わったか。

この授業を通して、生徒たちは権利を身近なものとしてとらえ、権利と権利との対立をどのように解決すべきかを考えられるようになった。新学習指導要領「現代社会」に書かれている「幸福、正義、公正」を事例に則しながら具体的に考えさせることができた。

４．記念講演

「思うは招く ～夢があればなんでもできる～」
（(株)植松電機　専務取締役　植松　努）

講師の植松さんは、北海道芦別市で国からの支援を受けず民間でロケットの開発を行い、JAXAと共同で人工衛星打ち上げに成功している。植松さんは子どもの頃から紙飛行機が好きで、それに没頭した。高校のとき、将来宇宙開発に携わりたいとの夢を担任に話すが、「今の成績では進学は無理」と言われる。植松さんは猛勉強して大学入学を果たし、流体力学を学ぶ。名古屋の航空機設計や新幹線設計を手がける会社に入社する。その後、実家のある北海道赤平市にもどり、父の工場を引き継ぐ。産業廃棄物から鉄を選別する電磁石の開発に成功し、それで儲けた利益をもとに、北海道大学永田教授と協力してロケット研究に乗り出す。何度も失敗して、ようやくロケットを宇宙に飛ばすことに成功する。いま植松さんは、宇宙のことを楽しく学ぶ子どもたちのためのスペースキャンプを毎年開催する。また広大な私有地に自然エネルギーを使ったスマートシティを建設する計画もある。

植松さんは次のように言う。高校教師はじめ周囲に常に言われ続けた「どーせ無理だ」という言葉は、頑張れなかった人が他人の可能性を奪い、自分のレベルに他人を引きずり落としたいために使うのである。「どーせ無理だ」と言う代わりに「だったらこうしてみたら？」という言葉を使う人を増やさなければいけない。やりたがる人、あきらめない人、工夫する人が、今の日本には必要なのである。　　（県立上鶴間高校　落合　隆）

平成23年度倫政現社分科会
研究発表会報告

1．はじめに

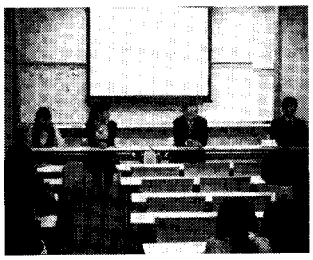
平成23年度研究発表会は、今年３月27日（火）午後、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校において、講演と２つの実践報告という形で行われました。

2．講演「サービス・ラーニングの理念と実際」

筑波大学大学院人間総合科准教授
唐木　清志先生

唐木清志先生は、『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』等のご著書がある、社会科教育学・アメリカ公民科教育論をご専門とされる先生です。

サービス・ラーニングとは、「地域社会の課題解決を目指した社会参加によって公民的資質を発達させる教育活動」とされており、ボランティアを中心としたコミュニティーサービスを通じて行われている実践です。具体的には「リサイクルプロジェクト」「近隣の環境美化キャンペーン」「地域の課題解決」などの様々な社会的活動が行われています。



知識や技能は習得するとともに活用しなければならない。社会的な見方や考え方は、現実の社会の課題に取り組むなかで実感を伴って理解されるものであるとの考えが背景にあります。だだし、体験するだけでなく、体験と学びを結びつけることが大切であり、しっかりと準備し、じっくりと体験を振り返るときに学びは起きます。そして、その際に、生徒の意思決定の自立性がどの程度確保できるかが学びの鍵となります。

サービス・ラーニングの生命線は体験そのものではなく、学問的な知識・技能との関連性にあるとのご指摘は、サービス・ラーニングに限らず、様々な教育活動に通底する重要なご指摘と感じました。

3．実践報告

①「ソーシャル・アントレプレナーシップ教育の実践について」
慶応大学飯盛研究室VITA+　磯谷　美帆さん、河野　佑佳さん（総合政策学部）

VITA+（ビータプラス）とは、慶応大学飯盛研究室の学生５名で発足した、若い世代のアントレプレナーシップ（起業精神）や生きる力の育成に取り組むグループです。この場合の「生きる力」とは、問題発見・解決能力、コミュニケーション能力を意味しています。その育成方法として、実際に起こった出来事を物語風に書いたケース教材をもとに、何が問題なのか？自分だったらどうするのか？という主人公としての疑似体験をし、ディスカッションをする授業を展開しています。

2011年度に上鶴間高校で行われた「まちづくり」をテーマとする授業について詳しく実践報告をしていただきました。また現在様々なケース教材を開発中ということで、興味深い教材もいろいろとご紹介いただきました。

学生の方々の若い感性が、高校生に大いに刺激となっている様子がうかがえました。

②「サービス・ラーニングの実践について」
横須賀高校（定時制）　松本　一彦先生

松本先生には、前任校の実践を中心に、サービス・ラーニングについての報告をしていただきました。前任校では、高校内にサービス・ラーニングの拠点センターを設立して、社会貢献（ボランティア）、市民活動、社会福祉領域において、学習と連結したにプログラム作成、指導、研究を行っているとのことです。内容としては、「地域の課題やニーズ調査」「ニーズに対応した活動企画」「活動」「課題解決・改善策の検討」「課題解決策の提言や改善方策の実施」などの流れで活動が行われ、具体的には、「県立知的障害者施設の園内喫茶の運営」「高校生公益活動リーダー塾の開催」「ハイキングコースの携帯用バリアフリーマップ製作と配信」などの実践例があげられました。

この活動において大切なことは、「評価」であり、「受け入れ先からの評価」「活動先からの専門的な評価」「生徒の事前学習と終了後の活動レポート」などが大変重要な意味を持ち、その成果としては、生徒の知識、思考能力、実践的なスキルの向上や生徒自身の達成感が見られ、大学進学の実績にも良い影響が出ているとのことでした。

サービス・ラーニングにおいて、身近な県立高校からの積極的な実践報告をうかがうことができ、自校にも是非取り入れてみたいとの声が多く聞かれました。　（県立逗葉高校　斎藤　基博）

訃　報

渡部瞭先生のご逝去を悼んで

地理分科会顧問の渡部瞭先生におかれましては、2012年６月22日に逝去されました。

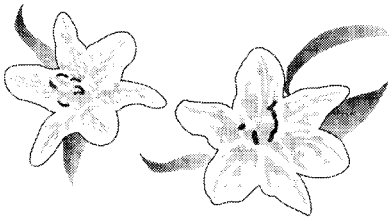
渡部先生の突然の訃報に驚くとともに、誠に惜しい人物を失ってしまったという感慨を抱くのは私だけではないと思います。長年、地理分科会と社会科部会で活躍された先生の思い出話を中心に話をします。

私が渡部先生と初めて出会ったのは1978（昭和53）年夏の野外巡検（長野県菅平地方）で、初対面の時から博識ぶりが伝わるとともに、落ち着いた物腰が印象的でした。後で周囲の人達に聞くと、先生は敬虔なクリスチャンで飲酒はせず（愛煙家でしたが…）、愛妻家としても有名だったそうです（私とは正反対！）。

また、1999年の夏に行われたヨーロッパとアフリカにまたがる西地中海巡検では、渡部先生が団長で、私が副団長を務めて無事に成功させたことも、今ではとても懐かしい記憶です。

しかし、最も濃密な時間を共に過ごしたのは1996年に出版した「新・神奈川県の地理」の編集の仕事でした。長年の地理分科会の悲願であった神奈川県の地誌発行という目的のために、教材委員会の委員長のポストをなげうって自ら参加され、大いにその真価を発揮して頂きました。先生の仕事に対する姿勢や情熱、神奈川県についての知識や情報など、我々は多くを学びました。先生が参加しなかったら、あの本は出来なかったのではないだろうか？現在もその思いは強く持っています。その編集の仕事をしながらパソコン操作にも熟達され、ＩＴ技術でも優れた業績を残しました。

定年退職後は地元の藤沢市の郷土誌の仕事など

をなされていたのに、突然の悲報を耳にしてとても残念でなりません。

改めて、渡部瞭先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。　　（県立二宮高校　比佐　隆三）